日本一統志

六十八之九

三十五

862
160

類
號
冊
35

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3－1

日本一統志巻第六十八

目録

一 摂津国 河内国 大坂西ノ丸御留守居内府公ヶ上覧事
大坂ヶ城ヶ出来事
并ニ内府居城を築城ヶ出ス事
一 摂津国 永禄百姓を治らゝ伏見城ヶ入事
河内国ヶ右衛門ヶ養子御預ヶ被ヶ成事
并ニ内府御領分全吾中納言元和ヶ御立帰ヶ事

福原達夫氏寄贈本
福原達三郎氏記念図書
福原達夫氏寄贈本
大正図書館

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』　請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志巻第六十八

作野肥後守大坂西ノ丸御門番屋敷より
被差置事

同大坂ヶ御城内ニ扱ヲ使ハル事

茶屋居長右衛門悴久兵衛を深城中ヶ出ス事

朝ヲ大坂城中ヶ三城百姓ヶ支配盛野一時ヶ
秀しかい輝元秀家をせしめ三城ヶ事を窺ふ
伴ヶ孔ヶ西丸ヶ出内府ヶ公東御遷後ヶ居御
留ヶ居ヶ〻〻ヶ作野肥後守を以ヶ差置雑人ヶ掛て
御百人ヶ置ヶ為ヶ被ヶ利中納言輝元ヶ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

を賴み御法度に改め家内の如く両名か
居住の所に其の事かゝ増田右衛門方へ有之
右中渡し両名早く明け下り退散を立ち出
仕候も上列士かゝ実家かゝ人か名も知らず
御理を受かゝ我儀も御届を居を影れから
お名〳〵にて四度事東國の郡寺に雖ふ
及是非に於て所後切ふ迫り弱速生ふ〳〵見え
悟し家内に御仕様は迫に申し退く事奇
名に遂言しかゝ八年九月使に立ふ事十四日夕
より十五日に立り及ん度ら白仕即此なる迫

言に出是非〳〵當名を入用にてかゝ八船に向て
ら請取此なる守一身の續く内に信ふ〳〵元来に
者の御国に居勤〳〵に八始終持ゝ此に知ます
ふすれりふけり白八後切ゝお果ふ所も迫二位
内大臣源家康居所に是り生ふ所の名ゆまに雖
人乃注来に世話〳〵迎も大仏掛燒立下る
其後雪清に御奴に才ゝ子斗に後〳〵来の迫
言故申九ゝ後に立燒に御御
押寄ゝ下討取に燒激しふ輝元ら中
ふに言ゝ連ゝ家の清代かも此仕野氏れり

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ケ様の所ハ一騎一人成共未和ヲ家ヘ味方ニテ
引入ハ益ヨリ多百人ヲ見ハイヘ共方々ニ思ヒ
切セヲ者共ハ寄〳〵討死ならんとせいせい方ハも二百
三百の手負討死ハ下出来上ける西風打〳〵
吹ける共ニ西ノ丸ニ焼立〳〵家煙城中ニ渡り
くゆる煙の数焼ものくいちゆ容ヲ情を以入ヲ敵ハ
成ル当城一時ニ焼ハ〳〵成くい不申意早竟
ハ野も羅ハ退ハの中ニ成ハ輝元ハ
ハ野ハ退ハの中ニ成ハ輝元ハ
ハ但〳〵諸人の急り成家〳〵一ノ方の使者ハ
す流ハ向所ハ逃ハを輝元兼り故西ノ丸ニ移

りくく秀頼補佐の義を下ハ御ハ其後
ハ〳〵ケ様ニ退〳〵ハ〳〵奉行中ケ様ニ入〳〵知ハ成ケ様
〳〵辰巳ハ様を感入〳〵ハ乱世ハ武士ハ家ハ断ヲ不
ハ野ハの不尚遠ケ事記〳〵ハ〳〵なハ野ハ皮元来
法ハ信代ハもハ以ハ上列ニ数代ハ城主ハ
人ハ一ハ幕下ハを法ハ先祖累代の家
ハ成ハ後ヲ事下ハ〳〵ハ早〳〵ハ家ハ時ハ
を法ハ〳〵ハ又ハ石事ハ輝元ハ下
ハ〳〵ハ矢ハ礼義走ハ〳〵思ハ立ハ退下ハ
神ハ〳〵ハ遠ハ一ハ成ハ〳〵ハ野ハ

所から我れ死し跡家名絶て記子孫もれし先祖の不孝早竟に益なり此の不孝ふく十六日早天に輝元の方へ御暇申たより若年の溢者共一もなく定の義に知り毛利家から弓鉄炮二百挺長柄百本鉄炮押へ家来小三郎迄お遣引取せいもり毛利家住方宜輝元名代より中合へ輝元に別而の左右入給へ家原公の如く御使被遣候出雲国計らひ申きに成の事を記あり如くに

然に十五日の夜於市中に評定決し明十六日の通国乃家原方へ下責居城に成り先に成見城に上方から家原公乃居城に成しに妻子方入置上に諸彼へ如き芸に生捕に東へ下向に成軍門に晒に江戸中的云秀忠江戸に来和為に生きに成に生捕に成叔人出る江戸の城に下立退城に生捕に引給に成へ先に成見城に押寄に成に仕出に成に毛利輝元に家来秀家方お法に成に先に成掛に成に出に成に居の中に毛利平の一族に兼引出なし人に云に居

内藤左宮殿の頃く事も可ありしかく小く両人使
いにて大老五奉行中から内藤の事を城代
出ふらる居高方に上り度内府実東ゆく
城に入ふい必定ゆく其城長く持ら居屋敷の
ら以早くよりお渡ゆ於ゆく両国ゆく上方ゆく
逆四位侍従出ふ一両人也中国る居内藤ゆ
方に其九州渡ゆふゆ於ゆく中国る十万石ゆ
逆四位侍従出ふ一松平之一族も内藤ゆ遠出城
ゆら名十万石家可ゆ於同人い秀頼ゆ折
ゆ大老五奉行の使文ゆ一所明に可お渡れゆ

中出ふる居ハ使者乃去ゆ家九ゆ為清重内藤ゆ
ゆ出ふ一ふ故内藤も幸ゆ幸有大坂ゆ中出
ふ方ゆ可安ゆ立出ふ早速家九に入ふ一ふ居
ゆ討伐す高ゆ中出ハ内藤時宜ハ可ふ知
ゆ度大名ゆ滅ふ冠ゆ着ふ一ふ家の親ゆ滅る
ゆ者度ハいふ通言せし使ゆ先ゆ行出ふ
出ハ同出度ゆ表ゆ顔色ゆふ同ハ
内藤ゆ出ふ三河ゆ遣ゆ相元為真ゆ滅ふ
立腹ゆいゆ士ゆ方ゆの恨ゆふ主君家
府ゆ反ゆ宮殿を抱歌方ゆ可成ハ方ゆ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

乃ち此ハ知しらぬ人間ゝ法官せーハ江戸長
藩の合戰とハいひながら御ふも働ふ者甲州お
入の者ども柄を分し三河国清の百五百石取
出ふ者ども四百石清ふ足軽ゝ百ゝ方ゝ
を屈め降参せんハ生命ハ助ケ遣ハ
二百石の者知ゝ上総佐倉の城主二万石もと
初ハ思ふ様ハ此の意志ハ動ケハせふ者ハ出
ゝ先ふ者を西を西を西を内度親ふ入者ゝ火
花ハ散らし合戰すふハ遠方ハ思初せ申ハ
早く出よハ無ゝ多ハ有ゝ引立ハ居者

たゝ滅ハ此ゝ流し申ハ姉しん是ハ自ゝも
家原ハ神ハ家事ハ持ゝ白ゝ若ハより今ふふ
絶者者事ハ去迚ハ内度神ゝ言ゝ男
や芸芸方ハ船しゝ神ハ方ゝ御ふ自ていゝと
親ハしゝれらハ色ちぬ人生方山口ハの意志ハ
を助ケ法ゝ出しゝ中ゝ人ハ結構ふ者ふ
者よ来ハ兵ゝ使の者の首おゝ一人の使ハ清ゝて
追返す積りれしゝハ中ゝ意志ハも芸方
より出きハ憤慨ハ我ゝ家ハから我ゝ抑る
ちあ神ハ松平一統ハ言使ハ歌方ゝ来

こゝ安らせふいとふかゝへ一風ゝ欲ゝ出ゝ
ものゝもとゝ紙ゝ代ゝ乃ゝ始ゝ軍書ゝ
出ゝ出ゝ安ゝ武士乃安ゝ如ゝ流れ一ゝ点ゝ
人元を嗅ゝ居内友一同ゝ返事ゝ下ゝ入ゝ大
坂ゝ乃使ゝ引出ゝ居ゝ内友ゝ方ゝ
ゝ代ゝの入ゝ故ゝ吳ゝ
云ゝ但ゝ方ゝ大坂乃城ゝ
ゝ代ゝ道具一方ゝ
ゝ代ゝ借ゝ事ゝ
居ゝ宿ゝ方ゝ乃ゝ入用

れまゝ家原方より何ゝ
ゝ千ゝ
ゝ返ゝ中ゝ
ゝ一ゝ
ゝ使ゝ
ゝ首ゝ
ゝ一ゝ
ゝ居ゝ
ゝ刺耳鼻ゝ
ゝ坊主ゝ
ゝ文ゝ
ゝ居ゝ
ゝ唱ゝ
ゝ使ゝ
ゝ嫁ゝ
ゝ畜生菩提ゝ根清浄致テ白ゝ
ゝ文乃使乃者乃刺ゝ

来り侍りしまの首級を給りらまき教くふ却出けま
命下幸く迎帰り急ぎすがらも大坂に立帰り
如新ぬ告しかい三河殿始ぬくしく慣れ居内裏
かれいち踏潰しく生捕其逆賊成又せしめん
ぬくたまの大将ふ山名吾中納言秀秋の撫ぬ
浮津兵庫仁義弘浮佐ぬ石田三成諸将乃
命成同り秀頼市名代ぬくまし童ぬぬ出立
ら我ぬらしぬ信ふ軍勢八万三千余人七月の
廿日暮合ふ伏見の城ふ我押寄せり
然ふ伏見城中ふ十三日ふ大坂表大変成安し

ら宗ふい中国西国の内ふ叛逆人出来おるふ
ぬ取ふ治せし故一両日ふ合せし知十六日の夜大坂
ふ立ら使来りらくふ我ぬ歩多家の事ぬ始ら和き
り保兼ら世間和騒のてすふ見始の和内府ら
亜ー義もらり中ら驚ら家ぬ我ら中ら居
方へ乱ぬの乱中を集メ義城乃用意ふ示し合
せし如大坂城西ノ丸ふ伏所紀ぬる立退紀来ら
城内ら通ら入ぬせしふ十三日ら夜ら中ら中ら
合ふ味の様出入すふすれまふ大ぬの安士ら中
を乱居方ら消ふ去ら寄ら中成安ら歌ら

中ハ城祇紀後ちゆんれ紀ふもせよ家原ニ居
所ハ新ノ生ふ如日本國ニ掛ッても皮ニ骨の續
合ふ其内ハふ下後事れ紀然ハ何程の深ふく
敵方ニ示ノ尓ノ合ハ城ハ城ハ紀取ふ事ノ
もふ知城内ニ入ふ事難城定ハく内府ハ實
ならハ関東ニ下ッて一人御会ハ合ハ用ふ了ふ事
行要ふ事ふもならハ丈文ふもれノ一分のふえ
悟下ふ事れノニ以の和ふ接板故早く京都
ニ出ノ又ハ三ノ東ノ東ニ下向せノハ其乃遠
御用ふ立悟ノ後くの御ノ伺ノ年間信長
守乃ハ枕御ハ以て家名を御幕下ふのふ
せり
然ふふ居内反ノ評定ふハ松乃丸の加藤ニ
て義生ふ若快ハ将猪俣ニ東下ハ家
定乃ふノて御ハ政所乃摂ニ云事頼乃
近一族生ハ当家乃軍ニ一の在城文ふ
ふハ松の丸ノ高ふ松平五方遠厨近政方
其後ニ悟生ふノ中送ふ松平五方遠
阪ハ立て中乃ハ当度の事ハ品ふ近ハ加藤乃
篭城ニ頼毋ふ為ハ最早敵方の御一族

生きハ早く下られ取ぶの処行末ハ在城ハ
来なゝハ上迷く敵ハ追立下ハ
急度ハ逃首下ハ取ぶ中き敵ハ挟ハ将元来
学乃達者ハ下ハ馬の乃ハ詰かゝハ
ゐ乃ふハ名方のふ富ハ
ふなぶいハ云歌方ぶ一味ふぶの紫ハ
茅見ハ早速ハ城ハ立退下ハ去れハ名の
ふ富ハ城ハ城ハ出ハ云世るハ一ハ中沢秋
ハ一分論大坂ハもとふハ一ハ東ハ
下りハも内府の涉ふ富又下ハ来れきハ是

より馬ハ止ハ下馬ハ通ぶ涉ハ東ハ
ハ塁居ハハ長崎ぶ号ハ幸ハ滅ハ光信
を送らきハハ内ハ京ハ大利の涉内府ハ要領
ハ安ハ名武ハの中ハハ落ハぶハハ中ハも不
下宿の仕方ハ一向知り没収ハ笑止ハぶハ若
別ハハハ上一不慮の地ハ下ハふ名家ハ
続せらきハ事ハ楽頼成生き故ハハ世ハ間
の涉ハ孫ハ後世ハ中ふハ下乃家名ハ
ハハ幸ハ
如形城内ハ名歌ハ下セ者ハハ討死ぶ一変せハハ

御女中方若君達ハ何方ニ奉退ん易く防戰
を遂くへし其実西ハ若君方ハ中ハ
御立の所ハ大名御上ハ御内方ハ小者ハ
ハ百一乃事ハ其ハ足弱乃者ハ鍋島家
ハ江戸家老下頼中命ぜハ拵ハ亜しかハ
迚も不迚ハ是も鍋方一味ハ是出ハ中処へ
十八日乃暮ハ及ぶ鍋島加賀ハ家二千
家ハ引具し胴切ハ城外ニ扣せ小性両人ニ
連て本丸ニ案内ハ西しハ若君ハ
我ら若御殿ハ遠ハ遠ハ御乃ハ出迚て本丸へ

請し對談ハ及ハ乃如亜義ハ中ハ内方御脈ハ
ハ御事御ハ中故鳥居長義ハ十ニの長吉ハ
御遠御足藤若君方ハ御頼中度ハ云しかハ
鍋殿も持嫌御長ハ出家ハ不下ハ何事実東へ
ハ為ハ義波阜中殿云ハ国方ハ通りかし
東海道ハ勿論水口ハ長東ハ諸乃事名ハ家
ハり一方の諸ハ乃も女中方ハ子ハ同乃成御しハ
晩亜ハ通ハ皮迚同伴中頼亜ハ病中ハ禁裏ニ
下奉入ハ物も家ハ乳しハ中早ハ急危
故奥方ニ長ハ中入ハ御出ハ奉遅ハ御若方

乃中ゟ武田万千代丸十二歳ゟ三歳ゟ迄ゟ源五郎殿孫
祖父ゟ高坂弾正忠ゟ軍法迄ゟ習ゟ
内ゟ行ゟ迄ゟ遂ゟ学ゟ
太輝十一家ゟ中ゟ何の思ゟ事ゟ
中ゟ結城城ゟ上方ゟ振ゟ
海ゟ出ゟ度ゟ軍ゟ花ゟ
ゟ加賀ゟ小ゟ隠せぬ武勇ゟ量ゟ
屋敷ゟ兵衛督十郎伊常陸ゟ同年ゟ
羽柴ゟ秀ゟ足利達ゟ
ゟ負ゟ
ゟ遣ゟ

度ゟ四方ゟ
達ゟ一所ゟ
ゟ出ゟ
出度ゟ内府ゟ如ゟ
ゟ東西ゟ
ゟ軍ゟ
迄ゟ
ゟ
ゟ

ゐて死ぬべきこと云れかゝる女中方なれば此り切り早く押立
出しふ名ゐ抱れ〳〵ぬべき云しつゝ法ゐふ中間ふ
者れし内方ゐ所ゐ同じ討死乃是情ゐ寄ゐ
ゐきハ迷惑ゐりぬべ中故ゐ方ゐ収ゐ出ゐ
ゐアけ抱れ宅ゐ歩ゐるふゐ浦いゐ行度逃ゐふ
も知ゐ中ゐぬ〳〵荒らかゐ中ゐ大ゐ逃皆ゐ歩り
ゐゐ荒ゐ方ゐ中ゐ出ゐしゐ中ゐ掛ゐりゐ家
抱ゐ三挺持せゐりしゐハ二人合ゐ奉ゐ中ゐ中方
ゐ急ゐ歩行ゐゐ浦ゐ雑ゐ足鍋鴻方ゐ人ゐ
出入し浦中乃ゐ連ゐ角ゐ方ゐ一〳〵中者ゐ中ゐ安

自ゐ家ゐ抱十挺舁せ者ゐり途中ゐ行ふせしゐ
ゐこ抱ゐ行ゐ浦ゐ雑ゐ浦ゐ夜ゐ逃宅ゐ逃ゐ入
抜明ゐ方樣中ゐ中ゐ入れし〳〵
ゐ宅角ゐ方ゐ市所ゐ家ゐゐ者ゐ内ゐ浦ゐ耳
小達しゐ一流ゐ宅町ゐ抱ゐ五義内ゐ代宮ゐ
伯自し〳〵
ゐ宅ゐ者ゐ者ゐ悪ゐ悴ゐ五ゐ逃ゐ度思ゐし
行きゐ竜城乃ゐ中ゐ武ゐ才場ゐ者ゐきゐ五ゐ
ゐ出打死しゐゐ家名ゐ御乃ゐ者ゐ
父ゐ討死しゐゐ者ゐ孫ゐ後ゐ切ゐ

口惜く思ひしかども久五郎兵衛年老かゝる父上
孝深く中くに下退んれし是非く引退しく父子
ゝもか討死せい生涯に不孝なりまい共方初学し
くゝ生が父子の扶持成ふ切ふ扶ゝ成しなりまい
久五郎辛くゝ笑くゝ自殺乃童成ひ此ゝ病成ル
ひ物想ひ君へ乃たゝ親へ乃孝ゝ心ハ極重何きも
重くゝ孝親への孝ゝ父子の名ゝ孔子かしらゝ兵へ
の為ゝ天下に名まくの心ふゝもの成共上の九ふ
くもゝくゝいま扶ゝ本を成ひ敵ヶ成ゝ兵の伊志
乃御兄弟いう斗ゝ思ひ油川家乃士ゝ及中

中ゝ小者迄も退く去れし伊徳ゝ伊内深方の家
物成仕ふ去ひ兵ゝ何きも武ゝ入ゝ生ふ敵
れり当城乃地大将ゝ居ゝ居ゝ嬉ゝ久五郎
ひ扶ゝ父成人教し伊敵の本を成指く退迯ゝ
ゝ云ひまくゝ居家成お續しくの和ゝ
し於ゝ義ハふ成ゝ中切ふ居ゝも発明れる
悴乃理を矢へ物ヵ協ふ回言ふ例惑せしヵ老切
程ゝく然ハ久五郎乃強ふなふれゝハ一屋
の士頼もしく然ハゝ居の家名明徳ゝ苦ふせ
ぬもなれり扶大切の油川の伊名字ゝ源方ゝ伊ゝ

孫一人も殺りふ給まいたりも徒事と中伯父も兼
引せ〜れむ伊藤〜天下に名代器かせ〜家原
の御子孫は時給ふ口惜御よ〜云ひまろく久五郎
源太郎〜兄弟ふけ謀云ふ世〜まろく抜〜ま
ゝ何故御子孫孫ん小冥東ふも三人の兄弟もり
上方ふ五人ふ殺こぬん事如何〜〜下ゆ小〜
云ふ安達左馬仕源〜ゆ〜〜収ふけまいよ内房
ゆも黄つも殺懐成も下野ゆ家も上杉ゆ武房云
冥東に下り〜大小名は乱上方ふ起ふ〜ゆ家五
十日の内ふゆふ殺ふ登ふ〜〜其時ゆ家原云

いう祖乃長将ふくも勢〜云武房〜云上杉乃
多ふ御討死は惜と責ろ上方五人の兄達御一所
れ〜云御名家れ〜は吉の頼朝乃如〜再御家
乃無ふ事も下ゆ殺ふ〜〜志ろ〜来乃誤り〜
解消方ふ殺〜ふ殺ふ抜〜注意の通り安ふ子
息乃解消信濃守は石田方〜〜御〜出ふ中絶ふ
父乃忠義も殺ふ小子方〜鹿化兄弟達生捕く
石田方ふ〜まん小父宮平治の乱ふ頼朝助ケ平
家ゆ殺ふ〜二〜事〜の世迄も平家の蕪忽〜〜
云解ふ〜せいふ兄達方は宮〜皆〜殺ふ掛ふ〜張

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ふ〜〜ならに口惜しく思ひ二つ弁ハ一つ膝口の古疵故駆け
走りて自己ハ石田方に引せ共責てい生捕ハ人
帝〜〜伏見の城乃討死ハ大死ハ成に惜し誰
一人ハ供せ共ハの鍋冠る乃吉程かやみ〜〜ハ有ら
きと出り〜〜声ハ上ケて泣ハまい久五郎む〜〜ハ疲
立ハ泣ハ其辰ハ泣ん易思ひ〜〜来ハ泣て返りて
鍋冠る生捕ハ大坂〜〜引ハ乃詰ハ人庵家残ハ行
きハ泣ハ面人ハ泣一人ハ安〜〜ハ集て〜〜居の血
筋ハ書果ても徳川の流まいハ不後ハ中言成
逆ハせ奉らん〜〜駆出し追掛り長浜ハ〜〜

右馬大夫ハおて久五郎又来りても入ヤレ〜酒
井左馬ハ〜〜相言大蔵ハ夜叉作ハ鼻雲
て仕ハし十元伝ハ泣て泣ハ出り〜〜退ハせ
ハし出り〜〜浦り上りて悦ハ実ハも明りと
ハ出り長浜ハ上支故十五郎討死せ共ハ山形
乃城主〜〜ハ古四万石四位の侍従〜〜ハ立ハ
ハ代思乃城ハ文乃謀ハ〜〜出し故れり〜〜安〜
乃り

浪人迫謀永京ハ百姓ハ詰ハ代思城ハ入
事

所以歟不分明なれ共なほ預り沙汰する事

英内府公御所領なる吾中納言殿所に帰り

移る事

朝倉近国悉く大坂の下知に従ひ内府公の御味

方ハ れ一人も残る処なし然の

第師上林上下ハ第五一つ持来り居たり

小遣る事ハ内府公累年御志と成下御厨

きれ共度々ハ共方年以も家康と同心

ハ 故長袖ハ

ら千秋万歳の後ハ御法下仕ハ御速仕

計度実東迄発ち御先の速の御法羅仕責る旅宴

城御先に討死仕御先に死出の山ハ御待更ら

第に下居上ハ中切る蕃屯りしハ五畿内の取出

小も家康公計度ハ御減亡歳ハ千人ら千人の

せ一故

然る処三成ら信方迄謀に出ら一代迄ハ御城を

当宮御宮居ハ御伝居ハ一矢種玉業天下一

面乃澤山ハ御支度乃城し無出申九の下一

実焼乃瓶に三千御ハ二千入ハ

ハ き ハ 弱 ま 事 し 其 外 御 米 蔵 ハ 数 万 石 を 何 の 不

足ら[illegible]し十万の[illegible]に[illegible]百ハい責[illegible]
其内他所ハ家原方ハ[illegible]亀城出勢出来[illegible]
へ下らん事難仕然ハ[illegible]
[illegible]居内交ら[illegible]
城に大事ハ[illegible]
掛ら[illegible]連東海[illegible]
ら西ハ十ハ方東ハ景勝上下ハ責ら[illegible]
[illegible]城元百日迄ハ[illegible]
ハ[illegible]乗ら[illegible]
十上せ[illegible]

之年家原ハ駿河ハ上城ら[illegible]ハ上京の御[illegible]
ら[illegible]
[illegible]せ[illegible]常陸ハ[illegible]山城国山科を[illegible]
ハ迄年ハ藏入[illegible]
[illegible]
[illegible]
亀[illegible]
城[illegible]十万石永原[illegible]地士ハ[illegible]亀城
せ一[illegible]
を[illegible]
[illegible]
[illegible]

誠しかるに本丸の手居方に其辺中入者く第数
ならぬ雑兵ふしは庶〻は欠け銀分の者共みな
一度に切出る様奉第〻いけし度乃ぬ大事ふせんと
夫人足の代りかもちいなを下仕り中入しかい者共
けをいい人ふくも時如哥〻収〻ふる居先功〻
大形故何拙雑人のすふく〻書きも打〻いい方
本丸ハ始終手哥計ふく下男〻足悟せしかい
外の哥ハ下頼ふ何ら以是形〻方ふなく〻
松の丸人数ふし為検ふ形度出城なと松平丹
手哥計〻何ら松の丸ハ手誠〻お侍い〻〻〻とく

本丸ハふ入故永京乃者共ふ及是松の丸ハ第〻
太〻台中入ハ〻ハ其以松平丹方ハ出五千石の才上
故騎馬十騎拙台百八十人〻〻松の丸をかゝめ〻ハ用
ふ下立者ハ百人ふハ意〻〻家来共大ふ収ハ者
乃二百人余の加哥ハ夫より降も同〻事中台故其
意中ハ也一度ハ逆川秋領ハ〻〻永京ハ者共
ハ者台ハ藏入〻〻ハ〻語代乃百姓〻ハ御達〻〻
用ふせよ〻〻〻中〻ふ家来共大ふ収ハ者
ハ成〻ものふれ雑兵ふく〻〻ハ中ハ其ハ十万余
〻〻風変れ者ハ其大軍乃方〻ハ者ふ者の如

小坂かしら城慥にうけふけ城に入事ふら
立枝の真実かはやく処はやく兼しさいふ程はなこと
はやく寄ぞいはくかやも早竟松の丸寄ぞいつい
小坂かしら皆くん弼に敗れて五方遠おあらく生れ
んかさ敗くん弼も頼んかに死の兵糧の意ふい一人も
千人も同一事れまき会はかかふ方程ふなるらい合く
きこ〳〵ふ角下生ぞ思ふふ十敗ぞ永京二百く
家の者ぞもに松の丸に入とふいはの患ぞ安く
ふふ
代人懸ふ山世寄の風雪に推ふしらく一国の注進

八七月十二日未明毛利両人吳東に下り大坂騒動
中国西国悪くはは敵ぞ懸ふ上方及大記の様程ふ
はやく む当城ハ行程の事ふとくも敵方にハ
お原一中寄ま〳〵其原はふ人員下国石ぞ祈
ふふ十八日の府中はは内議方為君達を調方へ
渡一退ヶ果一〳〵后二度目ハ毛利ふ中上其ほハ
一向敵の寄ふに侍播へ挟る所〳〵出玉義に
はく程分長〳〵下信ぞ兵糧ハ浜山れ三十日持
ヤくめハ家原に吳東ふはは意程浩ならんハめ定
ぞ代人籠城ぞ吳東に出安くふ味方ハ弱三敵ハ

海に於て元来家屋敷一切焼失致し候者
内度々和議に罷出候ハ
越ふ処七月廿日の夜ふけ八万三千余人の大軍
押寄ふ城内の者共城内の者
云出ても無駄代之籠城の人数凡合千八百人と
多能せ一ふ士合ハ九百人余残りハ足軽中間小者
の数和永京の百姓ハ加勢ふ三百の人数ハ
くたく中合ふ鉄砲ふ対拂ふ拂ふの方
ふ付ふ下自体もれ況後ふ防戦の法有
乙ふ海川家乃富士ふ居内家ハ和議ふ
味方も減一合りハ百ヶ程乃小谷の方ふ
玉薬乃ふ通乃対出一ふ出一ふ
何故拂ふ海安ふ
朝鮮ふ来着乃砂糖鞠ふ
残りハ十九ふ土一ふ砂糖湯ふ
す者共ふ治の上拂ふ
八合車ふも減惜ふ
出ふ切ふ車ふ働故
七月十六日乃夜代迄中の酒
二百樽余れ上戸の方ハ

代りに治酒おろく者共働仕深く情出し
大手の寄手合吾中納言秀秋の方おろく城中へ
懸かり五千八百の強文書象成富士が勝りに竜し
ぬく推量せしぬれば実かい二千ふ足の諸軍
すくく無事欲食自出かしこく掠ぶかに象出
し故五千ばかりに不下ぬ兵せしもむこと
おき七月廿四の子刻ばかり八百近の寄手の討死五千
余人負ぬ一万三千余ぬ安へしかい矢種玉薬
丈夫かしこく城兵手強く信しかい小ぬ思ひ
こく平攻せし故こ

に官兵衛中納言秀秋ぬ元来家康ぬ内意情が
らに成し故関東の御信ぬ仏を居しかい
出馬の口俗ぬから仕出強強くよ安し友ぬき走
かも下向せんぬ勢ぬ振くおこんぬせし処に石田
三成ぬ出文書ぬ成故ぬ及ぬ是ぬ出諸し大坂ぬ着
座のぬよ大手の大将ぬ定り向ぬしかぬも力戦の
ぬもれかくしかい諸方軍勢のかけ入くこる者が
働ぬふ故一分の者ハ手負討死かし無しく石
田軍法ぬ出御く家物乃支成し故御免ぬ
成く減ぬ退ぬ云へ云行ぬ大将の軍配

保様逝去遺かゝ当時中の法度書の如し
下略〜
新〜代迄の城に寄る所太刀の家中別云秀
秋の御の乃遺ゝ城中ゝ義寄手加へし
故代迄落城せし残る忘れ形見の孫族ゝ〜〜〜他門の家臣
いしゝ成る細井ゝ尊ふ元来ゝ主殿家
定の三男若狭守将勝俊家内が補俊房ゝ者之
を同秀吉乃政所ゝ秀秋ゝ仰出し給る延政
所を宮内在世乃御寵御様嫡ゝ仰上ゝ秋事ゝ
浅野又右衛長勝娘於保ゝ取醜誰ゝ孫延
不ゝ入〜ゝ利家の婿ゝ成ゝ〜ゝ天下ゝ其比主殿
家吉ゝ〜ゝ伝長ゝ清例ゝ主殿の臣ゝ主殿ゝ
を庭新の奉行を成壇の御死行故ゝ不自由ゝ
上若年の御時ゝ支持ゝ行家の事ゝ故諸方ゝ借
金買掛ゝ出の催促雨の降ゝ如ゝ〜ゝ来ゝ下人只
両人ゝ〜ゝ成ゝ浪ゝ一人ゝ石仕自らゝ手洗ゝ
下ケゝ〜ゝ邪羅乃思ゝ成ゝ無ケ御ゝ方の御事も進ゝ
〜〜成ゝ〜ゝ扶共ゝ度ゝ懐妊ゝ〜ゝ延ゝ
ゝ八ケ月ゝ備金寄ゝ〜ゝ家事も両人ゝ雅仕祝乃

貧乏の中ゟ出来たる仕官の勤務難進行
難き子乃出来ぬ貧かゝもせよかし其の沖之故
自も慈心考へゝ小学ゟも二ツ石小袖の下着へも自
小神ゟ長ゟ端〆強上沖迄乃為ゟ打ハ乃ゟ合セ中ゟ
他ゟ中へいかゝ沖ゟ他迄もゟ云ゟ出来たく外上の
障ゟ何ゟ難き内迄の苦ゟ乃ゟ勤為乃
出ゟ他ゟも仏神へ祈せ沖へ立身出世の吉事
を思へ難き中極ゟやらんゟ医ゟ元の居沖へ
貧ゟ学ゟ嫁しゟ子種ゟ止へ難き沖へ
歌ゟ其ゟ何迄仏神へ願ゟも子種の下ゟる

事ゟ出へ迄ゟ沖乃高位ゟ難ゟ孫乃沖へ
運ゟ与傳へ難ゟ出ゟの政前柳ゟ号へ大小名乃
家敷ゟ音ゟ思へハ勿体ゟ沖へ呆れへ呆教ハ朝夕暮
美味ゟ飽満ゟも楽へ難ゟも不思事へ難ゟも不
思嬉妊へゟ子三人迄流へ難ゟ沖迄育立成長せ
ハいハ斗の悦ゟ日本の大小名ゟ関徒沼作せらまへ
ものを難ゟ是の三物ゟ奉ゟ難ゟ沖ゟ沖ゟ故ゟ宮
ゟも孫の外ゟ沖難ゟ思ゟ思ゟ乃へ難ゟ高位の業ゟ
貧乏世界の中ゟ又ゟ乃ゟ難ゟも是ゟ貧ハ難ゟ高位
ゟ沖へ一教ゟ天罰ゟ沖ゟ他ゟ人中ゟ教へゟも不

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

出来我家ハ何百年以前も是ヲ家ふうの
きゝ産ミ捨てられ家ハ何百年ふ
ゝ越ハ何も子種ハ出来ず
ハ上ハ其方面の者ハ者ふいく人ハ
乃真似をもて試ミまよ〳〵ハ一時ハ
而ハ〳〵ハ然ハ早速乃形ハ
ゝ家ハ何有立ハ〳〵有ハの形ハ
秀吉ハ何考ハ成ハ而ハ
三男ハ下用立生きれ
下遅ハの思ハ秀次
秀秋ハ号ハ何慈恵の何父ふ同ま何羅
ハ〳〵ハ大小名の家数ふ大形
然ハ其次十万の大守ハ利中納言大江輝元家ハ
ハ依ハ何同思ハ秀秋ハ別ハ乃知行大国の一ヶ国
もらハ思ハ大国もれく何藏ハ減ハ〳〵ハ如何
幸ハ輝元養子ハ〳〵ハ脇ハ於何ハ其ハ
ハ〳〵ハ生ハ〳〵ハ小性ハ
志の家ハ〳〵ハ何ハ
関ハ〳〵思ハ秀ハ何ハ
ハ何出ハ〳〵ハ辞退ハ仕雑ハ
秀秋ハ家の事ハ日本二数

乃血脉不絶家ハ古来より陸中奥武家ハ
成り天下ハ名ハ器せし国情守大江廣元ハ来い
一代も他家ハ苦ハ絶ハ家ハ侍ハ事れし度毛利
本家の輝元ハ他人ハ生ハ秀秋ハ家格の若ハ
ハ嫡家の血脉ハ絶ハ家ハ子の心ハ逢景ハ
三男ハ毛利の藩ハ幸ハ若方ハ実ハ我ハ
家格ハ他人ハ絶せり不苦宜藩ハ捕ハ方ハ
秋ハ秀秋ハ若ハ小早川の跡ハ一ヶ国
を譲り毛利の本家ハ輝元ハ足元ハの事
徳田与豫守元清の嫡子早爰守秀元ハ別ハ

智も又備り力量ハ武御乃中ハ第一是ハ以
て輝元養ハ毛利の系ハ不下絶ハ分
別ハ松ハ国の御ハ生来ハ老衰仕大
老の職を勤ハ動兼ハ体近年病来度ハ参
ハ歳年の齢ハ惟下中然ハ世実ハ
ハ慈孫ハ国ハ譲下中子御ハ若
名跡来ハ立ハ以後の跡一生の残念ハ事ハ
預ハ秀秋ハ逢景若ハ小早川の名
跡ハ御ハ生涯の本望ハ
思入ハ預ハ元来逢景ハ国御一代ハ

法おなじくして年こころ古歌の法おのれまい
早速隆景の預り通らるるかい別宅居一草門
左馬頭秀秋公号一流布國三十三万六千百四十
石成濃ふ全吾ハ左馬の唐名故全吾中納言ハい
称せり但一説ハ宮内少輔ハ[illegible]平岡石之
在法云乃ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]文隆京逃去ル[illegible]
暮りて小早川の家破れん[illegible]隆京から濃
[illegible]ハ名法ふ[illegible]秀秋ハ乗引到小早川
家老智謀乃老ハ松原下野[illegible]云者永成指て
諫ル[illegible]ハ逆ル乃若士[illegible]秀秋法名上村山城中

[illegible]ふ力量の士ふ[illegible]ハ論ふ事幸せ松原下野[illegible]
指教一ハ[illegible]ハ人ふ名成知ら[illegible]ふ足の士の名ハ
思ひ[illegible]ふ書ふ成引連[illegible]白屋ふ城乃成立
退士

稲葉八左馬ニ成

御当家ハ[illegible]出ル佐渡守[illegible]号一[illegible]
丹波守ニ傍[illegible]ふ[illegible]守入道善意[illegible]
姫田勘左馬ニ利
御当家ハ[illegible]出一ハ[illegible]姫田加賀[illegible]盛
[illegible]上野ニ清[illegible]流布ル[illegible]成

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

三代将軍の義長出り
是等の始末しらく為り〳〵能州に立ハ
仁村の代迄に亜訓しらくけ合を同伴耳に達し
山口玄蕃允をよきを如侍人芸等集らく山口教人と
せし故山口欣伸に立退け合ふ及是に披露し
りふ祖に右同大に伴立後ろく能州一ケ国ハ
石放秀秋に八越前小の庄に流小者一人召仕初
衰れふ伸れりし成平岡石ハ智雪の古ふく
内府家康公に申くお諧秀秋宜く若家故如
朝に御〳〵侍人芸に追放し品くに立り生に

物に下らに八に定何分に伴に拵成ろく秀秋軍
領安堵乃義内府公伴に入ろ八お所下中に
欲く事為に伸神に運歩ふ如く小改に八
伴上支ろく伴頼に思に事れり深皮八如ふ
に八一度に同の伴ふ乃ろく秀秋乃方に
披露ろし秀秋れに八に秀頼乃為に八芸
下成ろく私握ろし故其改乃深皮乃威光伴軍
書の小改に下及に八ら改所に秀秋方上洛運
の祝ろ乃ま迄し如家康公伴胸中一初ろる
大将故筑前一ケ国に秀秋に成す人亜ふり九列の

内究竟の法方を備るものの深志故平國乃今
をらに幸仕度以ゝ以ゝ移ゝ
かハ平國乃守神文乃血判ゝ上ゝ向ゝ秀秋
平領於安堵ハ生涯内府乃恩情忘却不仕
ゝ生乃ゝ大事ゝらハ骨肉を離ゝ
下ゝ上ゝの秀秋乃代判をら被成ゝの所作ハ
法未遠方故血判乃名代ゝ以ゝ如是の
神文ゝ内府重ゝ間ゝ達ゝ訴訟ゝ
非ゝ内府兼ゝ被ゝ於ゝハ我分國ゝ列の内ゝ
一國ゝ一下ゝ上ゝ遠ゝ訴訟ゝ真実ゝ間

ゝ感ゝ家康ゝ免ゝ合戦平領ゝ秀頼
ゝ自ゝ家康ゝ再秀秋ゝ國ゝ立ゝ
悪ゝ家康ゝ内ゝ情ゝ上ゝ永ハ不及ゝ
以ゝ不本下一族の収ゝ不大取ゝ官知一万五千石
の平國ゝ与ゝ義極ゝ数ゝ義を家康ゝ秀秋
ゝ内ゝ三万石乃加増ゝ是又家康ゝ内ゝ故ゝハ
平國雖ゝ子孫ゝ乃男子ゝ被ゝ如ゝ
実東ゝ下向の内ゝ為ゝ刻後ゝ走ゝ内ゝ
出奔せんゝ支度の処秀頼の御乗下ゝ国所
をゝ以ゝ代ゝ乃ゝ事ゝ中ゝの評定

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

を文秀秋と偽へ、ひそかに石連出雲而三年あり
ける入る知らせ来りけるに石の事速武千万れ之義挨ひ
特と伏之左城ぞ〻まいハ只向ふ内府
ける居城を奉責事遠くたの事ニ成ハ内府
運命ぞ〻な一通ハ残し殺切ふ御果内府ニ
ける遣下ぞ〻なける脈乞れ申ら来上ニ合ふ中
かハ以返不大小弱ル強ル計ル度の軍ハ全く本式の
事小ニ下ル石田治部少輔深使ぞ〻審談ぞ〻又く
出ル自秀頼の為小ハ徒毋ぞ〻まいけ事ニ雖
然き共其方事ハ家康ニの身情深ル其上石田

かハ行ふ下知ハ清ふ事ハ内府ニの幕下ニ属
しふ小ル也石田治部少輔ハ内府の使
ぞ思然ハ伏見城責ハ辞退せい慥ニ内府の使
方ぞ〻又告ル意ぞ〻ハ定れまいハ幸ハ是若
挨ハ将勝俊最ハ伏見の為加勢ト篭ル居まい
ぞ〻又急ハ思ふ立退事ハ其ル一日早く
大坂ニ立帰ル伏見ニ押寄城責ふ使ふもく
外ル打ハ又合城中弱手ニ成ふ打の九の又攻
ぞ〻お易ハ定め其方胴ハを引具ル城ニ入く
持ハ〻ぞ〻ル天種玉業兵種ニ成ル胴ハ伏ニ告亜

くゝ丈夫こゝ世ハ世ハてきハ人教ハ防ぐ兵退
屈れ〳〵五十日を堪へられ吳ハ家康のおく
登り殺ふへし然ル時ハ其方天下江双の力を
確う上越ス者ハ無ふへし只ら自滅しく何ら益
無ふへし此度不如意乃世ハ変和の
世吳ハ遠ハ出ず拙者ハ故金吾中納
言兼代し支ら寄ハ有ら遠し大坂ハ片ハふ
代ハ着陣ス如城中ハ籠ふハ足の若狭ハ将
猪俣ハ池ハ家の勢を迎ハ敵ハ場ハ立退し
ハハ猶乃義用遠し片ら吏江居方所ハも藻
城責の体ハ然ハも籠ハ八千人責ハ口乃丁場ハの
方ハ軍奉行石田方ハ明渡し久ハ八丁行ハ伊下
知ハし引ハ平岡石田ハ守ハく也ハ責ハ多ハ
乃乃

日本一統志巻二十八終

日本一統志卷第六十九

目録

一 三成軍使林半助宛而家旗本ニ成り不寛松
阿主馬介ゟ引合ゟ事
伊代之ゟ岡ヶ原ゟ岡ゟ力戰ゟ事
美濃史唐城ゟ事
一 岐阜中納言秀信ゟ沙不運ゟ事
附三城秀信ゟ成諫味方ニ引入ゟ事
美本造百ゟ秀信ゟ海陸ゟ事

日本一統志卷之六十九

三成軍使林半助元家ロ不冨松師主馬外
別首之事

小代之冨寺居合力戦之事

英代史落城之事

朔之石田治部少浦八巳ヶ廓出乃夢ふを見た趣
大物の如く本体ハ床机ハ陽ハ掛責ロ〳〵侵出
を以て落城迄引の義ハ遅延すふ哭いへ哭こと
城中死ハ改ー家ハ拠ふ防しおハ多有お
死多くしらく下落ハ文ハ不又石田ヶ家老蒲

生駒中ハ城乃仲責口を足潮し三成ノ庫机の際ハ
来ラ吳足しなハ城中の出方戰の決才弘力を
振ラ戰味方ニ者云ハ大勢ハ頼ハしく永
全くしく早竟海ハ悪賞を貪らん撫
足へハ中ハ出ラの分ラ城落ん事十四日乃
事ハ不あ足ハ上方の大変ハ東ハも安
へ一ハ悲ハ加賀井ハ成家庫ハ
波ハ討立ハ可来ハ因ハ不足の立ハ
ハ振ラ出ハ如紀乃大坂城中ハ討洩ラ
出ハ家庫ハ加賀井事を逃ん事ハ

而ハしく一ハ二ハハ為ハ鳴方逃当城ハ行向ハ
来ハ密ハ中安ハ密計ハ永京者云城中ハ加
賀ハしく義ハ出ハ事ん方ハ方ハ出も
ハ迄も事ハ逃ハ云ハ元足ハ乃矢
文ハ射込ハ中ハお渡ハ上秀頼乃密
下石田ハ佐竹迫先文の中ハ色迫松の丸を切ハ
出ハ江刑永京口乃持口ハ射込ハ永京者ハ
毎日ハ城中ハ密ハお渡ハ云ハ云大坂
ハの事台出ハ事ハ事の方ハ一方方出ハ
大事ハ踏ハ足台せハ如ハ備生備中ハより

七月六日夜更て村辺し天文ゆ迄て城中に
勢ゆ下り入たるを不かく江戸ゆ藏入る処を
早速下りお渡る砲分ハ宜まちしらせて一分前
四中ゆ事を下変ゆの事敵永京勢大ゆ脱云
夜亜ゆ返言しく明晦日の夜寺の中れる蒲
生侍中ら千三百人の勢を言を後きゆ入る
ゆ勢是能もれしし夜ゆ松平五左馬防戦ゆ草
部宣夜乃る十七日乃軍評定ゆ言清寺ゆ南ま
ち日ゆ寄手ゆ取色十一日乃る夜の目もふ合陣の外
草部成の勢ゆ乃ゆ近瞰りし内ゆ出番も意り

ハ中ゆ乃成迄永京ゆ蒲生ら勢ゆ義くゆ入
しゆ云宣吾中ゆ云秀秋乃備然も掃寺城ゆ乃
一騎一人ゆ勢ゆ故石田ら使ゆ嶋津助ら宣吾中
ゆ云使ゆ別人ゆ御ゆ乃ハ二嶋ゆハ嶋ゆ能勢
下ゆ入ゆ乃語知ゆ道乃ら伊達ら元ら成ら長
ハ味方ら諸使勝ゆ徹ら中ら乃遣乃を寄ら
大切の使ゆ事ゆ家成ゆ乃ハ三成ゆ脱ゆいしくも
中ゆ寄ゆ事ゆ小ゆ長方ゆ家ら宣ま中ゆ義切使
枝ゆらハ引ゆんら討ゆ乃ゆ中ゆ乃を事助
押返しら抜きハゆく使ゆ用ゆ秀秋ゆの使ゆ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』　請求記号 862-160
ガラス使用

都八千ばかり中くたかく
若味方同士討ばかりなり城中ハ逆門ばかりおくさ
り故軍立不協ふべしいまい軍砲ハまふふ掛し
ども猶負の板益生きまふ是量の武士とい
ひつくふふたりとも通ひ中指の助ハ白志ひの
指抜ひしらく秀秋乃陣中ハ軍奉行ハ国家
が補三成中ハ落城ハ今四の内ばかりおくハ甫生
伝中一番ハ入ハ如八千の伊勢ハ是れ大伝
然ふふ伊勢一人もふおハ如何の思ひふ伊逆事
兼ねハ三成出ハ上いハ伊軍立ハ兼ばかり

兼ばかり高声ハ中ハ色ハ秀秋雑兵乃陣を旗本乃
武者ハ出ふ松阿主馬ハ立上ハ是成伊使ハ
ものハ甫生伝中ハ松の丸ハ逆ハ乃者ハ勢
を引入ばかりハ高名乃一番ふハ伊ハ然ハ
城中若討略乃逆ハ乃者ハ者ハ松ふ在庵
下ふ入なふハ軍中乃兼ハ不吉の地ばかり兼ハ
ハ伊者を不ハ乃ハ伊ハ番ハ請ハ家ハ
助ハ出ハ松若乃逆言十三歳の若者ハ出
抜辞乃逆量ハ流石ハ助松阿主馬ハ一云の策ふ
ハ出ハ者の伊を乃ハ秀秋乃一番家老平岡

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

乙丑年新配振ひて城中及び遠方に発
せしめ新野に入り下知せしかば是が秀秋の指
図なりと探入りて松の丸の大将松平左馬頭忠吉
大音上て江戸を忘れて東軍に加はれと
呼はりしかば是を聞て城内に
故十九の落城せしこと
疑まじく下知すれば只一人も殘
知りしかば永原の軍に
進をれしかば永原は
遠く石五十三人持の
永原の中に武者溜に掛りて十万石の
加恩を配分し一所懸命の地を領せんと城中に
入候しかば四年を引入て切て出松平左馬
を討取らんと迫付申ける力量早業百人に
勝まさる淺井四郎月ヶ瀬若狭守二子月ヶ瀬
長左衛門佐儲ケ出る大左右に松平左馬イテ
大将に成て来り迫左右出て流れ五左馬
鉾先を切り割り乃を抜き切り流る左右を
五方迫切りも世に諸人
か真只中を突て村三乃業初故只一突に

突教せしが一説に慈恵例に長左衛門と力士
五左衛門迫二ツ左右に切拂ひ故痛手れ
きい胴に切込み蒲生侍中馬場を逃れ是
をうく松の丸乃大石抜き取り切り一方
おうく掛り首おうく首取り鞍乃四方を分け
く又叫くに抜き責入る
松平五左衛門　大隅松平の二男篤
はる孫にて世　松平對馬守二万二千石
豊後臼杵城主　是も松平和泉守大隅
乃嫡子にて丸に剣片喰　松平五左衛門

松平和泉守は源氏の末にて代々恵
領篤山に居住し五左衛門と
名乗り代和泉守方おうく名乗
る事おうく方迫捕監に改せられ
ハ大隅蒲生方筑昌一方迫捕監を名
乗隅守對馬守の家下に大身の如五左
乃是新次郎一生涯おうく外の徒者おうく
家蒲生を爭に和泉方ハ源次郎と号し
一生も又源左衛門と号し何れも出仕
仕き迷惑し沙汰耳に違し内府に沙名人

かく一生武功を顯し世に立ち五方馬に城へ
但し父乃五方馬の如く清盛に討死嫡故と
ら伯一生立腹しかく其の日より五方馬の一代孫
諸侯より伯耆へ御入国に成り五方馬に
御名を改め橋廣故に下り伯耆に云し
我うせ者
然るに伯耆城大将の大将杉平主殿介家臣小性
より二百人計り一境おしかく寄来一時の内
かち度追追出しかく入きハ自入の者ども注来
十二度の戰ひ勝ち主殿介も十三ヶ所の疵負
て者も只八人に討れたき大将の橋おかく腹切
に引入れ橋をかけ和し主殿九人おく
負れから橋をかけんにする如に橋をより
大手口に使に来り清盛の軍使に列来
下野守はかく大将に清盛早落城に成
る橋をかけ高地に城方敵おも高名
せかく一生に下人に持せ一生有かく
立向に主殿介はもつかる橋を又掛廣し
れから完に第七世の中に自慢に事を記
討死自慢はいれ抑れまに成清門家三代乃

討死為すべき場を思いて内も外も同じ事なれば主人の家たを討て高名かせよやうしけれ
ば如新の働き遠き雷士乃声を掛て如新の声を聞て立ちかたまり八人続て戰に
疲れ一時に二人ばかり果てたるを二人拝
領して向ふ処を主人方へ情も法るべおく
ふ鉄炮か玉十二三ばかりやうに来て二人ともふ
らと書を倒れ倒れ主人かも鉄炮玉突
向ふ処に玉二ツ飛来て腕へ当ふ時に持
上ふ鉄を取落せし内別而不下師源左の雷士

足出おきぬ弓張の鉄を入るやうに云事なれば
鉄炮指ひく云事なれば上ハ早く御引入ると鉄
を杖ハ突て武代出きハ主人かを張りの数ケ
所乃手疵痛むもおしも堪ずやうに突て
武を指ひ志を感じ地も討死せるを見れハ
槍を掛ケ戻り猪勇をせるハ用のいとまなく
乃禮義ハ知らぬ早く首取て高名ひやうに云し
ハ別而不下師利ふ告新し出らハ力かく合を
張き頼ひやうに云ハふ内平の方か敵か出て首
取らんやうに立平ふ部ハ主人かの三人迫切ハ内一方

刀ヲ振上レバ、ハラリト首ハ落チ、
ヲキシ故別不審ヲ入ル者共ハ
敵ハ、モケ様ノ振舞ヲ惜ク人ヲ教ヘ
ヲ薩广言ヲ別ハレキヲモ洞ハラカ入
ヲ

十月朔日ハ深溝ノ松平ハ七ヶ所ノ内武ヲ
ヲ海ヲ吟味ヲ生キヲカ松平ノ一門中
カ名代ノ者ヲ出ヲ云キ十度家ノ
近武士ノ吟味ハ不ル
十月代ヲ主敵ハ松平清ノ

城主ヲ
代ノ者ヲ
敵ヲ追出シ死力ヲ振ヒ戰ヒヲ負
ヲ敵ハ諸ヲ主従四人ヲ
小市郎兵衛ヲ早速ヲ
ノ追ハレ張ヲ清長ヲ
眼ヲ振ハレヤハレ武ヲ
振ヒ出ヲ者ハ者ヲ内ハ働ク人
ヲモ敵ヲ亡ハ海ノ軍ノ味方ノ海ノ
者ヲ已ハ迫モ死ヲ者ヲ惜ム者

死生乃山をいとゝ速かに石下村に最期なる迫き父の
急ぎかに市郎安すりも御ら一働下至ら
同時に逸こゝに見るゝ流布安浮津坊八十人余揮号
あふ裏中に三分寸天別ゝ入り遍き切りかに切ゝ也
きい部も漂村こゝ虎口に引ゝ敷ふ海小一郎
只一人行十ヶ所云ふ敷知降ゝ深ゝを負浦及り
返ゝ討死せ一を父清長流も流人能ゝ
れかめゝ以の若い行家の恩に死格下ゝ
味方ヶ所の合戰か部味方のお死せ一体皆病
代か果ゝ出るゝ行云のゝ手味方の場合

馬場義忠手負出ふこゝ海道の評判こゝ
子のふ行家か父の出ゝ世の習こゝ出て掛ゝ
引上一か三郎乱ゝ倒ゝ小市郎中ゝ死不
切父清長を部こゝ思一か崇一ゝ志ゝ
分を清長行を清一ヒリヤ中ゝ死ぬゝ小市郎勝
負を仕ゝ一討死れかゝ神ゝ作ヶか城出ふ故
出一か書ゝおき一か父の清長城ハと云声
耳か入り一か人ゝ一こゝ思ゝ呼ゝ云
れかゝ俯伏か城ゝ死ゝ一か通き武房の若
者こゝおし一ふぬ部も れかゝ 活出ゝ機嫌能

孝懐ふ奴小死の追親のいふ事を能く吏請ふ
出来しとかなり是ハ小篇畳の續く生けり
死物相応ずに切なる呼吸の暫合を四十
三人羅列外く浮ふ屋居小ずに居ふ三尺
八寸大業物ハ振るも宣ふ思く生ふ者を
筑前乃中分浮田喜左衛門に名字續く日重角
に名字ハ切声も石掛浮ふ一打に打処を生
法一討に八比奥者に行乗羅ふ拂ひしか
日重角ハ縁より下ハ車切りか切殺ス所を當
喜左衛門ふ掛ふ内度浮北喜左衛門を小秀秋

馬上り浮田喜左衛門打取ふ高らかに呼れ
かなり首を取上ふ

内度家　三河ハ譜代

中奥内度右京進義清　藤原氏

都ふ國くふ出ふ処の度京氏も國くの一字
を上小重ふ河内ふ出ふ内度伊豆の浮度
加賀の加度乃数の如し是ハ元来の豪家
とふ又古家ハ生番乃武士五拾家の
被官に仕ハ國ハ侍ふ一階一級を
昇進す浦ふ浦平拂ふも其者

遠藤系を淀領と共國乃一字を重て
名氏ゝ世ゝ

義清
一男浜若丸清長 未七万石宮城侍従守
二男高太郎清三 未三万三千石 嘉別高遠

下り友の内ハ十ノ字を自ハ二男高太郎
家ゝ駿河守ゝ云ハ又い従四位侍従京
所同代を勤ふ高太郎四所太郎三歳ハ
家原ゝ伊賀所ハ旅ゝ寺島姓の高名
十度佐ゝ友の内の十の字浜を以ゝ
自ふゝの持姓白ゝもハ見乃浜太郎

是ゝ毛姓ハゝ高名せ一事六度之名
義ミしハ高太郎怒ゝ来ハ白ゝもハて
高名ゝ〳〵ゝ武士の姓之の字掛ふ
称するを以ゝ見ゝ之度の浜ハ十度高
名せ一ゝ成りゝ白ゝもハ姓是
ゝり

浜太郎 伏見討死
嫡子小市郎伏見討死
二男浜若丸 未七万石
三男三太郎 未紀伊守六万石

寺社ハ伏見城七月晦日 京都八月朔日の朝已

之時近松の九太夫二ノ丸押破らるゝ松平五郎松
平主殿助内藤父子おゐ腹せしかの家老長谷
元右衛門床机小腰を掛ケ大右衛門の同所を改めく
ゝ松へ〜如何ゝ者ゝ家来共絶叫の内ゝ大声
ゝ呼りゝ近ふ松の丸ゝ破きたる九太夫二ノ丸お破
らき両松平内藤父子ゝ討死ゝ来ゝ早く
ゝ自害を吉内昭しゝ仍て中ゝ勇ゝ敵ゝ
たゝ安らかゝ〜ゝ〜ゝ〜

國一ツ小城ニ而人家ノ吉首領ラン哉ニ爭ヒ寄ル
床机小腰を掛ケ打ケ一羅ノ二三人宛拝領シ
過去例ニ為ル事自是ノ内ニ五十人家ニ居ル床机
乃ち大小戸数ニ及ヒ墨ノ出ル去ル切之人
きニ一ち刀ニ出ル小国ニ出ル出ル大ノ小のおち刀ニ
居も年ニ所を深ク分ル居ち恵をおく
高名せぬ出ル浮ニ処ニ雑賀孫市走ル来ル向ク
お掛ケ成ち刀ニ出ル お掛ヒ寄ヒ者ち拝の
首元ニ所ニ名ヲ出ル 清ち刀ニ討
ハ善ヒ者武者ノ情を出キ教ヘ孫

小ヒを討ル
元亀長五年八月朔日午ノ刻ニ
ニ日中乃落城成ル出ル
ち迫も働キ不残討死ス事ハ
数の落城ル千八百六十三人乃内ニ居ち
一人出ル其外ハ悉ク討死
ル
石田方乃諸代男を責落シ
悉ク手ニ入ル如ク諸ヒ十ハ迄の
家康ニ志を致すニ近国の城ヲ責落シ

東乃ゆゑを下吾毋浦岡田迄の城い細門岳迄
を浦入道三位法下云旨左城しらく居しを責落
し生捕ゝ越中守方異国東方ゝ懸らんを避よ
ゝ云伝乃方角を向
小野寺遠成外　高田豊後守
小出大和守　友掛三河守
別所豊前守　松平伯耆守
生駒左近将監を先ゝ毋浦但馬の軍勢越
合三万八千余人にて一向ゝ五畿内ゝ中国西海道
南海道ハ残ゝゝ石田ゝ属し秀頼の御方ゝ

石田ゝ御味方ゝゝ我も我も遠近よりまいりの威
勢の有ゝゝ云ハ治まるものゝ五大老も中老も入
らハ出ゝ石田三成ハ諸大名悉下馬の体ゝ
ハ勢ゝ脱ゝ天下のゝハ吾ゝ出ゝ入ゝ
岐阜中納言秀信乃御不運ゝ事
伯三成秀信乃成諸ゝ味方ゝ入る事
関ゝ造ゝ秀信乃ゝ海陸ゝ事
朝ゝ京長五年の大乱ゝ大名の家ゝ空妻浮
沉の交中ゝも残忠ゝ越中守ゝ岐阜中納言秀信
乃ゝ十黄門ゝ悪逆長乃京ゝ云三法

河内守と云しひか秀吉守り立ち被露し孫ふ
天下を傾吾せしかの君をい流石の秀吉も廃
ふも世るの市を憚り美濃乃國主ち宗教し
三人元の知りち間藏入号を引く三十万石い沙
加年かい沙産不料ち名ゆく高を減けすして
万事ハ徳善院玄以僧正ち二人ち二条ふく沙生害の官の沙遺言をもく如影薄
職を都乃玄以所沙指南故世乃風俗をい慕ふ
ゆくかしも神を沙立不成如長と御ふく沙
後三位中納言ふ叙任天下の大小名も列る重くも

くれしにふも沙家柄故し當年十一歳し
然ふ徳川内府ハ一入沙病ま与ち我伝長の
沙の把を清くと抜ち失も長し五ヶ國迄乃分
領を廣ケし事織田乃台力故れ世ら世れらハ
波阜中納言ち云ふく沙偶ハ居ハ孫し孫史
家の生ひ人ハ堂ふ如ハも孫し与ら沙れる
沙姫君乃内を沙一ふを融ふの沙英弱ふく
永ハ恐志を与畫熱思院ハ乃思遠し在ふの
兼ふく徳善院ハ救度乃沙ふるゆし故玄以廃
を廃し完ふ君臣の上下服所ふ元中ち年

を考ふるまを乱し〻如一度信長公と仰合せ御命
同をはせられ〻〻沉倫の波辛敵へ乃信長公
中かも唐かも例し〻乃まなはせ長家ゝを感〻然
るかを間は在世乃内を御はせ遠ゝのゝお使〻故
遠〻迄も不遠迄事ゝ共厳を越し〻〻下然ゝ
ゝ〻當年迄もはなれ〻〻お是〻〻当暴
を御親子乃御孫迄も下より作出遠ゝ如春中か
世乃初騒寺秀信の御ふ運ゝ成ゝ
然るかゝ度家康公の大ゝ大ゝ〻〻〻評義変
遠〻〻まゝ徳善院ゝ〻〻告造両家老迄内ゝ中

下り翼つは事か家康表ゝ御力を下ゝ而死生
なゝ内府ゝ〻〻御一所かは見惜〻〻御家運目
出度かるへし〻遠まは見迄ゝ〻〻両家老迄
ゝゝ両度迄秀信ゝも見へ入るの如ゝゝ
同ゝゝ成家康下向乃支度迄出来〻〻若紀大ゝ
〻〻ゝ度始〻の出陳れゝは馬初の異義羅を
書〻天下の耳目を驚〻高名を残〻〻〻
ゝ御自筆ゝも御使者をゝ家康ゝ合の日後
御安台の如家康ゝも江戸萬門同〻事か思召〻
故御手紙ゝ御ん遠を不ゝ残家康ゝ記入

其日以ゝなゝ下着ゆゑ屋しき及中迄ニ台下ヤ有
大小名大概下着ゝ百人静かニ着座下ゝ成ゝゝゝ悲
志ゝゝゝ迄言成しゝかゝ波阜中納言成ゝ七月朔日立
ゝゝお家ゝ皆ゝ支度ゆゝまゝ出来ゝ波阜元
宮ニ掛ゝゝ招ゝ席ゝゝゝ如ニ日下旬ゝ御風気おく
日後延引ゝゝゝ残念ニ御ゝ石田三成方より
為使者高頭ゝ頼方馬ゝを七月四日の夜ゝゝ中
入ゝゝハ十度秀頼ゝ様をゝゝゝ上ゝゝ家津ゝ上
陣をゝお止秀頼ゝゝ成ゝゝゝ陣ゝ別の
事ゝゝ凝ゝをゝゝめゝ国ゝ立ゝ国ゝ

毛頭ゝ疑ゝゝゝ初年ゝゝ中行末羅
知ゝ百一秀頼生き江戸愛病ゝもおゝ
十ゝゝゝゝ代ゝ黄門ゝ支配ゝゝ和ゝ入ゝ生ニ天下
乃ゝ及ゝゝ豊ゝもゝゝ秀頼ゝゝ引ゝ一ゝゝゝ
祖父ゝ拾ゝ慌皮天下ゝ章創乃ゝゝ法官ゝ
慶吉時代ゝゝ国秀吉丹誠を尽ゝ織田の代
ゝゝ成ゝゝ両ゝゝゝゝゝ早世黄門ゝ初ゝ
ゝゝ織田乃右ゝ言ゝゝ和歌を夾ニ及確拠ゝ
畫迄ゝ天下一統ゝお納自然ゝゝ高官高職ゝ
ゝゝ事是和漢ゝゝ乱世乃風俗初ゝを奉補

作例不知。然る古間、代屋の御渡世に手事
石田三成浪人ゆゑ、しらくの御事を頼り至中処御吉
事之極に御中に仕芸黄門水を御越成て秀頼
御分抱乃御美義を思庵下入御被召ゆの義
故及延引居まくの御吉事い隠く御志沼事の義
れり出ツけ一出るく出る年かの産不料ゆゑく
伝長公伝たるに御両代の至て御家の御事領屋
美濃近江二ヶ国下為御自中仕る御通言次第古間
ら遣事御墨下持系可仕ゆゑ言を上ふ矢達
一出ふ河瀬方馬分を引く中入一出恐れ

い折音三成方か中分も家老去い家原の方に出入
いく御逃走ゆる波阜に系着いく秀伝の出仕人入
に方近を引く下中至ゆく定を入中分一か河瀬
た馬分出ゆを寄ゆく波阜城下大至出り両屋敷
面く舞所る出道方出伝両家老方に御方ふ
事九に系上一入に方近を呼出一出后中入ふ秀
伝若年れ〳〵御安藤治兵衛是ゆ家の吉事と
おえゆき云に上ふる遠ゆく大切の事し入に方
近い年若一最ふ一近安紀一ゆく高橋一近
矢ゆく云老切の此おを出一再近安知入に

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ハヤ口上ハ江お遠百く市造を呼く姫孫のお
渡もちらハ可宜まを通習小性此およの国〳〵是
也月出度ハ事仆筆〳〵祝〳〵者も伝神を去信
ハも一度ハ如何惜ふ世ふも変化一天下の政乃
をもハ〳〵ハ家柄の一ツ今より石田三成中部〳〵知〳〵
節月ハお安〳〵事〳〵先ハ一ツ也屋敷屋張
近江の三ヶ国二百万石のハ知りハ屋敷料〳〵ゐまき
ハサアハ家中の者ゐも又双信ゐ双信のハ加増や
ハ〳〵まおく亜志やん〳〵〳〵頭ふやら江性ハ姫し
ハふ若者ゐ乃者ハ家ハ年若ハ是ゐもれ一

ハ〳〵ハ〳〵先ハ姫を出せ祝仆〳〵〳〵小性通習
の性およ月出度〳〵ハ法ゐ〳〵位の祝ゐ〳〵先
通言ハ十方〳〵中造百〳〵ハ安ハ者ゐ〳〵ハの事使
者を伝ハ使せ〳〵のゐ〳〵を入江た通を姫〳〵一
〳〵者乃了者ハ者〳〵中造百〳〵安〳〵ハ於〳〵ハ武士
出ふ者出陣乃支度一変改せふ事ゐらんハ
〳〵ゐ〳〵ふ了者ハ〳〵ハ吉左者ハ止ム度一
川ハ〳〵ハ〳〵〳〵〳〵ハ吉左者ハ止ム度一
造ふ所ハ我ハ者天下の政乃通ハふ行〳〵使よ先〳〵
三ヶ国ハ〳〵澤山れハ〳〵ゐ利輝元徳川家康秀吉

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

を入るべき天下から二百万石の大名は三人あれども
のなり抜きまた遊事と御よ入るなり
高一万石余の額に敬を寄せ是名言は所もなし
月入江戸年若れまいは江戸の為遊をくい大事の
ゆえ某を与えて出使者の江戸屋敷に参
ゆえ是も望ると若年の方中是一万石余
出ぬ御百俵不自由御ふる暮かく六十万石の
年寄の行年を命ずるなり是は度乃藩の出世
御此お年は隠居後迄行事も士分の末のまし
去れかく出るべ入江ゆえ一同御出るべ遊事を
六双倍は有まるる表老の加増は俗分は分かく
三双倍三百俵もの元れ〳〵変〳〵や入江たる遊か
更元出るべ加増は慶美洋領抜支配人は寄上り
乃保変年寄両人乃清合かるべ十双倍乃和行千石
〳〵是両人の御文ゆえ言なるべ書渡す欲る実
一高一万石ゆえ和行は年かるべ死ぬ遊世を
〳〵出ゆえ言の出かる出ハせ法い銭乃出ぬ
らち力乃出かる死文御働るも千石の士
沢山御れいものゆえ是いゆえ法い年寄の一万石
御家御働るべ若の元な〳〵家御乃事相者出

家老望月喜兵衛が軍書かもみそヤレ
合点しやイヤ此通書下中へ入れ高橋立ち
出口上ゲ同志一人承知仕り同下中合
為又追々下中屋敷の書部屋石田ら使者河瀬右馬介
大小脇一緒を上ゲ走帰り主人三城方へ出合中
安しかハ浦上ゲ脇ヒさしく乃時方ハ高ヶ浜着
ゆき長大小名乃男ヒ自しゆ様ゆ脇ヒしゆ
為り
夜明ふと合図つ秀信ハ本造所を始メし
名高代書頭飯沼十郎兵衛南部久兵衛高ヶ

弟祇之丞世右ハ知らず出ふく救持乃軍人ら
右衛門久乃田方かゝ合中ゆり早速羅及通言れ
ゆき夜中ゆゝ行ゆきも有屋出も同章しゆきハ
迫ゆく浪足要細ゆ通言ふ下及ゆ使者をハ早
速帰しゆゝ義ハ当家の浮沉秀信乃身ハ有て
密裏乃大事ゆきハ様ゆ下合いゆ一人ゆと
下出合も一大事のなれしい人中ハ計な是能を
知ず不中如本造左馬介進ミ出ゆ中ハ長ふ乃
職ハ入法ふ永を不顧ゆゝ兼きハ他のな家成待
合ゆふふ及程乃ゆし書ふ処を行ゆて下上ゆ

先ッ思案も分かもふ入ぎるふくふ八年津出給こと
大小名なる不し弾文内府ゑも一万石江戸中納言
秀忠ゑ公ゑ家ゑ此度ハ世家を以
く様体の大将ゑ世ゑ安ゑ
ゑの如ゑ文変改ゑゑく江戸内刻ゑ国ゑ世一味
ゑゑく天下乃人口を世清と成信長ゑ世命
と諸人奉重ゑ世家忽ゑ滅ゑ度
ゑ国ゑ確況ハ古間乃世墨ゑ
ゑハ中せ芸侍ゑ善悪をも不無十七ゑ下乃小児
ゑゑゑ天下の大事を思ゑ下ゑ

一ッゑゑゑゑ不取如ゑ其上ゑ間ゑゑゑも世取ゑ乃
世家ゑ筋刻ゑ国ハ其家ゑ一味の同心のゑ呼
きん事も耳穢ゑ早ゑ十ハ方ゑ初まの世逆言
在ゑゑ早ゑ芸東ゑ世馬を下ゑ遍ゑゑ江遠ゑ中
ゑきハ百ゑ誠ゑる在始ゑゑゑ並居ゑ士大
世家老ゑ芸ゑ間ゑ一同ゑ造中上ゑ如何ゑん
中も同ゑ事ゑ情きけんゑふ世ゑ家ゑ芸味
方ゑゑゑゑく世和厚ゑ様ゑ信長ゑ三代の世極
機ゑゑ国方ゑゑゑゑく日本の大小名ゑ帝
我ゑ迄も世ゑゑ出ゑ並ゑ初芸事も羅成ゑ中切

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

く庫を立居先く〳〵伺ふに秀信も奥に入
孫三郎出て人迎習を迎ひ相共造り中なも
一利も如何せん〳〵言ふへ伺たる迎隠病者の軍嫌
乃侍人故是に以て〳〵命ぬる家老共乃了省遠ふ
法庫〳〵命の義ハ先ち一重美濃尾張乃両国ハく
六十余州小江重大国ハ国ふ上向別迫入り三ヶ国のハ
主ハ〳〵ふ〳〵せ孫ふハ人力のふ及如天ヶ君〳〵板孫ふ
郷ハ〳〵中物乃ヶ行事も〳〵ハ中ふ丈夫ふハ人数
も〳〵〳〵ふ抱ふ〳〵根義穀満元ハ一度ハ天下ハ
ふを下ふ無ハふ〳〵ハ家の命ふ誰を下中早〳〵ハん

を〳〵変下無ハ〳〵中上きハ侍人の幸合ハ武を嫌ハ
板行物乃如一高橋一迫弟中乃ふハ先以度乃
冥東庫日本乃大小名貢を冥東ふ残一胴斗ハ
伺ふ〳〵一弟体殺膚江志伺庫ハ乃ふ三中も
明り謙信以来日本ふ名高紀上板家乃武勇を
究一ハ〳〵ハ兼ふ君ハハ父伝たハ〳〵ハ攘ハ短命のお
中ハ世せハ若流矢ふ〳〵もハ清ふ成ふハ織田嫡く
乃ハ京国明後ハ〳〵ふ〳〵石国方ふ中戦ち国迫滅
一重乃を伺ハ流ふ成其ふ伺ハ変定ふ〳〵ハ一〳〵孫日
冥思を中せ一如七月五日乃夜ふ入石国源ふ補

方から同遺書のごとく持参し萬門秀信へ
（思せられて其書を）
波阿中納言秀信卿は幸い三君的孫なり
秀吉者言の旨主と
若年なれば雖為其分十歳を以て老侯一方
を支配成られ候ハ、更慶長近日乃列
を下為自中事之下ものを遂者之為文秀
頼一身の進退ハ彼ら計らい第ハ天下
一を高家勿論之業為家を代門を同
手以不下諸略を象為以遺状如件

千時
慶長三年八月　秀吉
治部卿

大老中
中老中
奉行中

如斯の遺書を以ては其所にも一ツ書を以て大事
ハ作和山に入を以て後ハ早く近日馬を
下られの第に長老主長ハ私欲の節目を忘
きしハ是非もなく治部卿ハ萬門秀信へ石田治部

伊勢を秀頼に下し給ひの沙汰形をきゝ不及
是非秀信乃比興かなら久共三成謀計是し
ゝ下ゝ云こ又三成方ゝ病中か使者河瀬左馬助和
山へ立ち寄り内ゝ其旨申造百ゝを始評定乃
向ゝ波阜へ出馬しゝまゝ小病所早ゝを以変案
沙下向いとゝお止石田沙同心ゝ秀頼に沙宮中の
事ゝ如此ゝ云事を名兼り忙然果しゝ大廣
間に集り更義しゝ内ゝ善悪有賞家の大事
ゝならんゝ所田治善悪へ下安宮ス事於二条ニ
沙又信乃沙遠誠乃才一故ゝ近言乃兼

知世ゝ事いれしゝ義お知きゝ家老ゝ諸の
格ゝ下お安ゝ出ゝ造度ゝ両人連ゝ早馬を
おゝ二条へ走上り要細を申ゝ沙安と
ゝ夫しゝ是ハ萬門ゝ沙乱心ゝ
ゝ大島家ゝ作天
何ゝも方ハ西家ゝ沙家ゝ滅亡ゝ時ゝ所も内府ゝ
乃沙ゝ中沙子島方同所ゝ早沙婚礼の沙
内言近来兼ゝ重生ゝ早ゝ命律沙出勢ゝ
しゝ乱乃部ゝハ石田ゝ所曲ゝ事起ゝハ
諸大名下ゝ敵ス内府ゝ
おゝ天ゝ仕ゝ天下の人重及万民沙迷を慕ふ上

ハ篠ヶ山年の權家京公の沙ヶ原ハ遂ハ秀信ハ
ハ池門家門の上座ニ〜國主の威を全〜ゝ沙ヶ
孫永〜お續ニ〜ふ〜〜しハ沙運須沢生き迚
ち岡ち〜元来沙家来ハ節ハ〜ゝ吉下の家〜生ふ
ハ田ニ〜沙一味ハ事ハ情来ハ沙ハ秀信ハ
家迚〜京ハ掛ヶ下お止ニ〜ふ事ハ兎ハ
下〜来造ハ別家迚〜迚ハ沙ハ入り〜ふ事の
若ハ波阜ハ胴者續〜沙何事ハ〜ハ〜ハ
黄門ハ伊和山城ハ沙城ハ〜ふ伊法ハ諸ハ
云〜ハ両人ハ〜ハ〜ハ濃を流〜ゝ上ハ〜及是ハ織

田ハ家ハ以後ハ時ハ〜ハ来ニ〜ハ方波阜ハ家
迚せ〜を三城ハ〜ハ迚を出〜ゝ亜黄門ハ〜ハ
沙入ハ両人ハ元中ハ出合ハ〜ニ〜達ハ押止ニ〜
ハ格ハ〜ハ両人ハ伊和山ハ〜ハ三城贈面
〜ゝ度ハ記ハ内府ハを下元ハ宮偏后如新と
洋ゝ世種〜天下ハ利害を下ハ波阜ニ清州ハ
両城ハ東西通路ハ咽喉ハ〜ゝ籠城ハ国〜ふ
〜〜ゝ方ハ加藤を迚下ゝ三ヶ国ハ沙台国ハ偏
秀頼病ハ如〜来弱ハ生〜ふ〜ハ早ハ〜ハ
天下の大小名代ハ〜ふ知ハ秀信ハ〜ハ沙ハ

切ふすと持ちて真実を書しゆ述ふ造百く両
人も拙ら一國の主ぢいふ三城慥に清台中ことち力
一振り黄金三枚充し出却ふなの来ぬ是より大
坂に引越中迎脈乞し黄門主従ハ波阜に立
帰り登ロ本造百くハ密ふ出京し云ふ所ロ安
くまハ忙然果ら両人中ハ通ロ加賀ヲ経三城
当門まふ要塞張ロ為巡見波阜ロヲ立寄給
述れ申ぢ云しハ多を亜しまく秀信の沙運ハ
国出度く然ハ其ロ黄門ロ従台ふも不ヲ及両
人ヲ元ふし台寛恵の力量を若士を勝ちく

三城を生捕早く内府ロ引ふらき謀ヲ為一意
然ぢ一味いふ多し知如計略生捕ぢ沙汰遅ヲ
ふ中く然ふ時ハ第一ヲ大臣徳川家ふ於ら数ヲ
大功ぢん申ぢ孫述し両人ハ波阜ロ出帰ヲ
ヲ

日本一統志巻六十九終

国立国会図書館　ダイヤル『日本一統志 155巻』請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志　十三

特 3 1

北泉社蔵書之印

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用